

## 一

今年は先ほどもお話しがございましたように、安田先生の十七回忌の法要が二月の十九日に京都で勤められました。まあこうして大地の会でも皆さん方と一緒に安田先生の十七回忌の法要というようなことを兼ねて先ほどお勤めさせていただいたわけでありませう。

安田先生の一生涯ということをごしてあらためて振り返って考えてみますと、先生の一生涯は、もうひたすら曾我先生に出会い曾我先生の教えを受けて、その先生の教えをさらに明らかにしていこうとなさった、そういう一生涯であったとこういうふうに見えるんじゃないかと思ひます。

ちょうど親鸞聖人が法然上人に出会われた、その後の親鸞聖人がやはり法然上人の御恩にこたえると、そういうご一生涯を送っておられますけれども、まさにそういうことを感じさせられる、そういうご一生涯を安田先生はお送りになったなあということをご改めて思い起こしておるわけでございます。で、そのことのもつておる意味と申しませうか、それはただ曾我先生と安田先生との間の個人的な出来事というのではなくて、じつは真宗を再興する、そういう歴史的な意味をもっている事業というものが両先生を通して行われていったということをご、私は先生が亡くなられた後、先生からいろいろ御恩をいただいたその御恩に少しでも応えていきたいと思ひながら今日まで過ごして参りましたけれども、その中でやはりひしひしと痛感しておりますことはそのことでございます。

でそれは、そもそも「真宗再興」というようなことを口に出されたのは、じつは曾我先生なんですね。これは『歎異抄聴記』をお読みの方は思ひ出していただけるかと思ひますけれども、始のところによすね、「第二の再興を要する時期に再会している」と。こういつて曾我先生が『歎異抄』の講義をなさるにあたってそういうことを述べておられるんですよ。で「第二の再興」という曾我先生がいわれるのはそこでは触れておられませんけれども、おそらく蓮如上人を第一の再興と、こういうふうにご考えておられるのではないかと思ひます。かねがね教団の中では蓮如上人を「御再興の上人」こういう言葉で言い表してありますのは、『御一代記聞書』の中に出ておるわけによすね、真宗聖典では八八八頁に出てあります。念のために拝読しますと、

聖人の御流は、たのむ一念の所、肝要なり。故に、たのむ と云うことをば、代々、あそばしおかれそうらえども、委 しく、何とたのめと云うことを、しらざりき。しかれば、 前々住上人の御代に、『御文』を御作り候いて、「雑行を すてて、後生たすけたまえと、一心に弥陀をたのめ」と、 あきらかにしらせられ候う。しかれば、御再興の上人にて ましますものなり。

こういうふうによすね、『御一代記聞書』に述べてあります。まあそこにはとくに真宗再興という言葉は出ていないわけによすね、蓮如上人が真宗を再興なされたのかによすね、そのところは多少疑問が残るところではないによすね。本願寺を、親鸞聖人の流れをくむそういう本願寺として再建して行かれたという意味は当然ありますけれども、真宗再興とこういうふうに見えるかどうかということによすね、少し問題があるのではないかなと私自身はそんなことを考えておりますけれども、そんなことはともかくとして、まあ大きな仕事をしてくださったには間違いない。

いま蓮如上人の御再興の上人といわれているそのことの意味については今回は取り上げませんけれども、おそらく曾我先生が第二の再興というように言葉をお使いになっているのは蓮如上人を第一に真宗を再興してくださったそういうことを念頭において今こそ第二の再興の時期を迎えていると。非常に大事な時期を迎えているというようなことを『歎異抄聴記』のはじめのところによすね述べておられます。

まあ『歎異抄聴記』はよすね、それこそもう亡くなられました日野賢憬さんとかもちろん安田先生とかこういう方々を中心になって速記なされたものを編集されたものでございませう。当時はまだテープレコーダーはございませぬので。まあ中心は安田先生であったとこういうふうによすね聞いていますけれども、それだけに安田先生ご自身の中にも曾我先生が真宗を再興すべきときを迎えておるんだと。またそういう大事な課題が与えられているんだというようなことを中心にしなご『歎異抄』の講義をなさっておられますので、それを筆

記して聴聞しておられた安田先生にとってはひとしおの思いでお聞きになっておられたんじゃないかと伺われます。

これは余談になりますけども、私が大谷派の本山の出版部長の役職をおおせつかって本山の仕事に呼び出されましたときに、せつかく大谷派に出版部がある以上はやはり大谷派として責任のもてるものを出版するということが大事なことじゃないかと思ひまして、そのときに曾我先生の『歎異抄聴記』を出版部から出版したいとこういうふうじつは思い立ったわけでありませう。

でそのときに、もし原稿がですね、そのときに速記をしてくださった方々の原稿が残っておれば、少なくともそれを集めてもう一度改めてそういうことを土台にして、もし編集し直すところがあれば編集し直したいなあと思ひてそんな努力も少ししてみました。ただ残念ながら全部集めるということはできませんでしたですね。一部、その一部の中にやはり当時このことを取り上げると具合が悪いという、そういう、戦時中ですからね。なにかそういう批判的なことなどもございましたから、そういうものは結局取り除かれております。私はそういう元の原稿を読んで、そういうことも全部復元できたらいいがなと思ひましたけども、どうしても不可能でしたのでそのまま丁字屋から出ておりました元の『歎異抄聴記』という書物をもういっぺんそのまま本山から出したんです。

そのときにいろいろ安田先生とかあるいは日野さんに詳しくはお尋ねしなかつたんですけども、やはり非常にこのことを成し遂げなくてはならないというですね、そういう情熱といいますかあるいは非常にそのことに誠心誠意力を込めて曾我先生が問題を提起していかれる、そういう曾我先生の講義に非常に心を動かされたというようなことは、いくらかそういうお話しをお尋ねする中で聞いておったわけですけども。

## 二

とにかくそういう真宗を再興する、そういう時期が到来しておると。またそういう大きな課題をいただいております。曾我先生はその再興の精神、真宗を再興する精神とはどういう精神かということについて「歎異精神」ということをそのときに述べておられるわけですね。つまり「先師口伝の真信に異なることを歎く」と、それは『歎異抄』の序文に出ておられます言葉ですね。後で見ただけであればいいですけど。

その先師口伝の真信に異なると。それが真宗再興の精神なんだと、こういうことを曾我先生は強調しておられるわけですね。そしてそれでは「先師口伝の真信」とは何かということについて「二種深信」ということを取り上げておられるわけですね。そしてさらにその二種深信といつても二種、機の深信、法の深信というような言い表し方で二種深信の内容が言い表わされておりますけども、その二つが並んであるわけではなくて、法によって機が開かれ、その機の中に法をおさめると。またそういうふうじつに法をおさめておられるのが親鸞聖人が明らかにしてくださっておる二種深信だという意味で『歎異抄』の最後に出ておられます聖人のおおせの言葉ですね。弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり。さればそくばくの業をもちける身に、てありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなきよ。とこういうふうじつに親鸞聖人が言い表しておられるそのおおせの言葉を取り上げられまして、機の深信ということを非常に強調しておられるわけですね。

これはそういう意味でただそういうことが『歎異抄聴記』の中で『歎異抄』を講義なさるときにそういう問題を提起しておられるというだけでなしに、このことはそれこそ機の深信を徹底していくということに曾我先生のご一生は尽くされているといつても言い過ぎではないと思ひますですね。とくに最晩年、亡くなられる前にいわゆる差別問題というものが取り上げられて曾我先生がその反省としてですね、機の深信が不徹底であったと、こういうことを述べておられます。つまり機の深信を本当に徹底し続けていくそういう先生の態度が、最後のそういう言葉のうえにも表れております。もう自分は機の深信は徹底しておるんだというのではなくて本当にいろんな出来事を通してまだまだ不徹底であったと。そういうことを言い表しておられることを思ひましても、その機の深信を徹底していくということに尽くされているといつてもいいかも分かりませう。

そして曾我先生は機の深信が徹底しなければ「現生不退」ということが明らかにならないという。つまり浄土往生の道といっても、まあ未来往生といえますか、未来に、死んでから後に浄土に生まれるという、未来、未来往生が未来往生ということに止まればそれはそれでまた大事な意味をもっているわけでしょうけども、外道化するわけですね。外道化という意味は私どもが自分自身に目覚めない。一体どういう身をいただいているのか、どういう存在なのか、自他の存在に目覚めない。存在を問題にせずして理想を求めたり幸せを求めたりする。つまりそういうものと何ら変わらないようなものになってしまう。

そういう大事な意味をもっているわけですね。現生不退ということが明らかにならないと、しかもその現生不退ということは何によって定まってくるのかということも機の深信が徹底することによって。そういう意味でですね、つまり真宗再興ということを取り上げられるのはなにか念仏往生の道がいつの間にか外道化しておる。もう仏道ではない。たんなる幸せ追求、理想の世界を求めるといようなね。それと何ら変わらない。ある意味でいえばそういうことをむしろ目標にしているんな活動をしておるそういう活動に比べたら全く無力といってもいいような、何をしているのか分からないようなそういう道にいつの間にか、そういうもののように思われておる。

つまり信仰でいえば、何かありがたいという恩寵主義のですね信仰の中に。教学でいえば非求道的な教学です。道を求めているのじゃない。たんなる会通をしている。解釈をしているだけですわね。教えをああだこうだといって、いろんな言葉を取り上げて解釈しているだけ。ほんとに現実に立って道を求めざるをえない。ちょうど今日の時代がそうですけども、いったい人間とは何かというような問題が目の前にたえず突き付けられているような時代ですわね。またそういう意味でいろんな出来事が起こっております。

先ほども宮城さんと向こうの控室で話をしておったんですが、宮城さんは大学の先生を勤めてますから、若い人たちの教育の問題に直接かかわっておられるわけですが、ずいぶんまあご苦労なさっておるようですね。誰も聞かないと。聞かないだけならいいけど、体を投げ出すようにして眠っている。そういう人を前にしたら力が抜けてしまうというそういうような、それは何も大学だけじゃなくて。今年飯田の女子校に行かなきゃならんという話ですが、私の長男がそこにおりますもんですから、宮城先生に来てもらわにゃいかんといつてですね。何かお話しをしてもらおうだそうです。宮城さんは心配していました。高校の方はどうだろうかといつてですね。まあそういうことで本当にご苦労ですね。

そういうことの中で突きつけられる問題ですわね。人間とは何だろうか。生きているということは何だろうか。こういう問題ですわね。教育とは何だろうか。そういう問題を通して改めて教えが聞き直され、何かその教えの心に触れると。そういうことがいってみれば求道的な、もし教学という言葉を使うなら求道的な教学でしょ。ただお聖教の言葉をいろいろ取り出して、真宗の教えはこういう教えだといつて、あっちこっちから引っ張り出してきて説明するというようなものではないでしょう。そういう教学も大いに、現にあるわけですけどね。いってみればそういう問題を、そういうふうになっておればこそ、信仰の方は恩寵主義的なものになっておる。曾我先生はよく「恍惚の信」という言葉を使っていました。酔っ払う。恍惚境に入る。「恍惚の信か自覚の信か」といって恍惚境に入る。それが何か信仰のように思われておる。そういう問題をかかえて、何か真宗再興という大きな課題ですわね。課題が与えられていることを曾我先生は述べておられるわけです。

### 三

そういう真宗再興の事業です。そこで曾我先生が機の深信ということで取り上げておられるのはとくに宿業、「宿業の自覚」ということですね。その宿業の自覚ということがこれがまた容易でないんです。ですから曾我先生は「宿業本能」という言葉を使っていますね。たんに言葉を使ってというよりも宿業は本能だと。つまりどういうことをおっしゃるのかといつて、宿業というようなことは私どもの理知分別では理解できないと。もし私どもの理知分別でこれは宿業だとかそういうふうな受け取った場合には、たんなるあきらめになるわけですね。運命とかね。ようするに無責任になる。曾我先生はですから宿業は理知によって理解で

きるものじゃない。宿業は私どもに生まれながらにして与えられておる本能、本能を感ずる。というような意味で宿業本能ということ、これは何も『歎異抄聴記』で初めて言い表しておられるのでなくてその前から宿業本能、宿業本能ということを繰り返し繰り返し叫ぶようにして言い表しておられます。

したがって本能を感ずるということは別の言葉でいえば、それを曾我先生は「大悲の光に照らされて宿業を知らせていただく。」と。つまり私どもの理知分別によって宿業ということがうなずけるわけじゃない。今回たまたま明日になっておりますが「宿業について」と。これはじつは私が出したテーマでなくて、この会を支えてくださっておる方々が、去年もそうでしたけどもどういうわけか私にはテーマを与えてくださるんです。去年は「僧伽的人間」でしたが、だからなんでこんな「僧伽的人間」といってははじめは気に入らんような顔をしておりましたけど、今年もなんで「宿業について」と、なんだか変なテーマですよ。説明するようなそんな問題ではないでしょ、宿業というのは。それでも仕方がないなあと思います。いろいろ趣旨をどうしてこういうテーマになったのかという趣旨を長々と書いてくださっておる手紙をいただきましたので、ああこれはもうお受けして行く以外にないと思ひまして、じつは明日になっておりますけれども。

この宿業という言葉はご存じだと思いますけども『歎異抄』、『歎異抄』の中にだけ出てくるのでなくて、最初かどうか私はそういう方面の学問の素養がありませんので分からないんですけども、善導大師の『観経疏』の中に出てくる言葉ですね、最初は。最初というのは私が知っている限りです。中国の善導大師。そのことは明日また詳しくお話し申し上げたいと重いますが、とにかく『歎異抄』の中では一三章にですね、

卯毛羊毛のさきにいるばかりもつくるつみの、宿業にあら ずということなしとしるべし。

と。どんなささいなこともですよ、「卯毛羊毛」という言葉で言い表してあるのは、どんなささいな、塵のような小さな出来事であろうと、あるいはどんな私どもの生活の行為であろうと、ささやかな、朝起きるということもそうですしね、顔を洗うということもそうです。ご飯をいただくということもそうです。生活行為ですわね。子供が生まれるということもそうでしょう。それはまあ、ご飯を食べることよりもっとおめでたいとかお祝いされるような出来事ですけれども。結婚もそうでしょ。あるいは仕事をするということもそうでしょ。なぜ仕事をするんだ。それは食わなきゃならんからと、こういうような理屈を、今日の私どもは理屈をつけるんですけど、なぜ食わなきゃならんか。生きるためだと。なぜ生きなきゃならんか。こうなるとあとと言えなくなるんです。

だからどれも理屈が虚仮であるということが明らかですわね。食わなきゃならんからと、だけどなかなか宿業としては受け取れない。朝起きて食べたりですよ、働いておるのもなにも食わなきゃならんのでない宿業、こういうようなことで言い表してあるのが「卯毛羊毛のさきにいるちりばかりもつくるつみの、宿業にあら ずということなしとしるべし。」ああいう言葉ですわね。もちろん結婚も子供が生まれるのも生まれた方もそうだし、生んだ方もそうです。生まれた方だけが宿業で生んだ方は宿業でないというふうなことで、そういうふうには私どもは理知分別では到底受け取れないです。虚仮とも知らずに何か理由をつけております。仕事をするのは食わねばならんからというのは虚仮じゃありませんかね。いかにももっともらしい理屈のように見えるけども。ですから宿業ということを知らせていただくということは理知的な頭で考えれば考えるほどむしろ反発を感ずるようなものであって到底受け取り難い。

そういう私どもの分別をひるがえして、宿業に眼を開かせてくださるという意味で曾我先生は大悲の光ということをおっしゃるわけです。そのことはもう少しお話し申し上げなければならんと思ひますが、とにかくそういう機心の深信といっても内容は宿業に目覚めるとこういうことが内容になってはいますが、その宿業の身ということ、それをさらに徹底して、それこそ曾我先生を通して眼を開かれたわけでしょうがそのことを徹底して行かれたのが安田先生のご生涯だといってもいいですね。

#### 四

つまりそのことを徹底してそこに人間は単なる人間ではない歴史的、歴史を抱えている。歴史的な人間。

歴史というのはただ過去だけじゃありませんね。もちろん過去はあるけども未来にわたって歴史をかかえ歴史を生きる。そういう歴史的人間。もう一つは社会的な、社会の中から生まれ社会を形成していく。そういう社会的な人間。ただそこに歴史的人間、社会的人間といってもそういう歴史社会をかかえて道を修めていく、修道的人間ということですね。こういう言葉で安田先生は言い表していますけど。そういう歴史的人間、社会的人間、修道的人間が、まあいってみれば生まれ出てくる大地である。宿業ということはずね。

それからもう一つ大事なものは真に人が固有の人となる。真の意味の個人ですね。そういう大地でもある。宿業ということが明らかにならないと、ほんとかけがえのない、固有の、個人といっても固有の人という意味はじつは見いだせないわけでしょう。仮にそういうことを考えましても、観念的に思い描くだけであつていろいろ理屈を並べまして、ほんとに身に染みて、かけがえのない大事な仕事を与えられておる固有の人。たとえばそうでしょう。親鸞聖人なら親鸞聖人が真宗という道を明らかにしてくださった。そういうことは親鸞聖人にお任せしておけばいいんだ、我々はただというのではなくて、固有の人という限りはやはりこの身において真宗なら真宗という名で明らかにされておる道というものをこの身においてあらわにされていく。そういう固有の大事な使命をいただいている。こういうようなことはやはり宿業というようなことがはっきりしてこないと徹底しないのじゃないでしょうか。

そういうことについても安田先生がそこに示唆を与えてくださっている。一方ではこういう歴史的社会的人間、歴史とか社会を背負って道を歩み続けて行く修道的人間。もう一方ではそれと別のことではありませんけども、固有の人ですね。だから固有の人といっても歴史や社会と別に生きておるといふのじゃなくてですね。まあそういったことがすべて取り上げられているわけじゃありませんが『親鸞における人間学』というテーマで先生がお話しになったのが本になっています。そこに人間とは何かということ宿業ということを通してあらめてそこから見直して下さっている大きな仕事をして下さっているのが安田先生の仕事だといつてもいいのではないのでしょうか。

それともう一つ大事なことは、ただそれだけではなくてその宿業の身、宿業の現実に応じて展開していく本願です。このことはこの大地の会の当初から安田先生が「展開する本願」というそういう講題でずうっと講義をして下さった。この講義録が大地の会の別冊一号、別冊二号という形で発行されているだけであつて、じつはまだ安田理深選集にそれが入っておりませんので、こういうことも何とかしなきゃならんかなあと思うんですけども。まあとにかく展開する本願。テーマだけでも大事なことを言い表してあるテーマですわね。何が機になるのか。展開するといつても本願が勝手にひとりでどんどん展開するとそういうことでなくて、展開するきっかけ、何が契機になって本願が展開するのか。どういうことが契機になって私ども自身の底に流れておる根本の要求というものが展開していくのか、そういうことについていってみればそういう宿業に応じてです。

宿業ということがいかに大事な意味をもっているかということと、その宿業に応じてそれが機となつてじつは本願が展開しておる。そういうことを明らかにしてくださっているのが『大無量寿経』だといつて『大無量寿経』の四十八願を全部取り上げられずに亡くなられましたけども。そのあと藤元君が受けて「呼応する本願」ということで、またその藤元君がここに出てこれなくなりましたけども。

つまりこのことがどういう大事な意義をもっているかといいますと、仏教を明らかにしてくださっている。仏教というのは展開する本願に呼応しておる、それが仏教の歴史だと。展開する本願の方はある意味でいえばなにも仏教という言葉の言い表す必要はないでしょう。ただ仏教が明らかにしてきたという意味で取り上げられておるけども、展開する本願は何も仏教じゃありません。どんな人のところにも流れている。ヨーロッパの人であろうとクリスチャンであろうとマルキストであろうと。ようするにどういう宗教、どういう思想、どういう民族の人であれ、そういう人々の底に流れているものでなければ、如来の本願なんていえませんわね。

だからそれはなにも阿弥陀の本願という名で表されているのはなにもそれが仏教と、一応阿弥陀仏といわれるけども、仏教を越えておるものでしょう。いわゆる釈尊とかね。仏教といつてもつまり仏教教団を形成してきたような仏教。いろんな宗派を形作ってきたようなそういう仏教を越えておるものでしょう。だから

そこに一体それならばそういういろいろな宗派を形づくったりいろんな教団になったりしておるその仏教とは何ぞやと。その仏教を明らかにしている。

大体立教開宗というのは教を明らかにすることですわね。だから私は蓮如上人を「御再興の聖人」と呼ばれていることについて真宗再興とっていいのかどうかということにちょっと疑問があると思いますのはその一点なんです。じゃあないのかとそういうふう言葉のうえでいろいろする必要はないから、それは私の学び方が足りないからかも知れないし、それはそれで私はまだそのへんがちょっと気になりつつ蓮如上人の言葉に触れたりしているわけです。まだ十分に私のところで納得しきれずにおるものがございましてそれをひとつ申し上げただけです。それによって蓮如上人の値打ちが下がるとか、そういう意味ではありませんから。

とにかくそういったことをいってみれば明らかにしているのが七高僧の伝統ですわね。だからなにも安田先生がはじめてそんなことを見いだしたとそういう意味じゃないです、七高僧の伝統というものは気がついてみればそういったことを明らかにしておる。七高僧の伝統をもう一つ明瞭に言い表してくださった。つまり再興ですわ。そういう大事なことをですから曾我先生と安田先生というこの二人は切り離すわけに行かないのではないですかね。人間としては切り離せるけれども、真宗再興の事業をしてくださった。そういう歴史的な大事業に取り組んでくださった方としてですよ曾我、安田という名は切り離すべきでないというふう思うわけです。そんなことを十七回忌を向かえ、これまでの先生からお育てを受けたことの中で今私自身の中に感じられていることはそういうことでございます。

ちょっと休ませてもらいます。

## 五

もう二十年前くらいになるわけですけれども、私と宮城さんと藤元さんとちょうど教学研究所に身を置くことになりましたしてしばらく三人京都におりました。それでこれはいい機会だから、この際三人で安田先生の講義を聞き、安田先生にただお話を聞くだけでなく、いろいろとおたずねしたりそういうことを始めようといつて三人で聞法会を、聞法会といつても安田先生に『成唯識論』の講義をしていただくという会を開くようになりました。二時か三時くらいからでしたかね。そうそう教研を抜け出していくのもなんですから二時か三時くらいに会場はおもに宮城さんのところでしたが、お話を聞いてあとは「先生今日は何がいいですか」と食べ物のお話をしながら一緒に食事をしながらいろいろお話を聞かせていただいたりしたんですけども、それが後から思えば最後になったのが先生が亡くなられる4カ月前ですかね、藤元さんところで今度は一晩泊まりで、ということでゆっくり一晩泊まりでということはどういうふうにして思い立ったのか記憶がありませんが、ようするに龍野ですけども、先生にも出掛けて行っていただいて、私どもも出掛けて行って、『成唯識論』のお話を聞かせていただいたそれがじつは今から思えば最後であった。そのときに最後だからいろいろ書いていただこうとそんなつもりではなかったと思うんですけども、どういわけか先生がいろいろたくさん書かれたですね。私もそのうち3枚いただいて帰りましたが、

「明晰且判明」

「観心覚夢」

「非不見此彼」

その中の一つが「明晰且判明」、明晰且判明ということはよく晩年ですわね、もともとデカルトなどがよく使っておる言葉だと思いますけども、まあそういうことはともかくとしてですわね、明晰且判明、信心についてですわね、やはり先ほど申しましたようになにか宿業の自覚、機の深信といつてももっとそういうことをはっきりしていく必要があるというような、そういう意味でもこういうことをとくに取上げて言われた。つまり教学というのは明晰かつ判明でなければならぬ。明晰の方は目が覚めるということです。夜が明ける。ただいろんなことを説明しておるものじゃない。そういうようなですね問題を取上げて明晰且つ判明と。

「観心覚夢」これはいわゆる『観心覚夢鈔』という書物があります。唯識の方から出てくる言葉ですわね。

じつはこの二つは他の人に差し上げました。私一人がもっているのもと思いましたが、私のところにはただ「非不見此彼」これだけを表装して、現在大分県のお寺に掛け軸として掛けてあります。これは「三十頌唯識」の第二十二頌の言葉です。「此れを見ずして彼をみるものには非ず」と。なかなか読みにくいです。此れを見ずして彼をみるものには非ず、五つの言葉だけで、こういうところは漢文の独特な短い言葉でですね。ほんとに日本語で表すとえらい長ったらしい言葉になるのですけども言い表してある。その「此れを見ずして」という此れは真理のことをいってあるのですね。「彼をみるものに非ず」彼の方は事実ですね。事実といっても真理に触れて事実というものが明らかになるんだと。大体私どもが事実といっているのは私どもが分別しているものばかりですよ。分別してない事実といえば科学的な、つまり客観的というかそういう客観的に見るそういう現象、できごとね。

人間にとっての出来事というのは、そんな客観的というものじゃないでしょ。悩みになったり迷いになったり、いろいろなその出来事が迷いを呼び起こしたり悩みを呼び起こしたりあるいは腹を立てさせたり欲を起こさせたり、いろいろそこに、それが人間がかかわっている事実ですわね。そういう場合に事実といっても、どうしても自分の分別でこれはこうだ、ああだと。特に分別といってもただ見たり聞いたりするのも分別ですけども、もう一つ唯識なんかで取り上げられる「計度分別」という言葉で表される分別は「推察する」、推し量る分別。見たり聞いたりするそういう分別、つまり眼・耳・鼻でなく第六意識の分別ですけど、推し量る分別。ただその推し量る中に、推し量るというのは意味を推し量るということもありますわね。計度、だいたい概念というのがそうですね。私どもは概念で分別します。机とか黒板とかそういう概念。もう概念を使ったとたんにある意味づけがなされておるわけです。机といったとたん、あるいは黒板といったとたん。早い話が猫にとっては別に机でも黒板でもないわけでしょうけど、概念使ったとたん一つの意味づけがなされる。それからそれだけが計度でなくて、是非善悪、是か非か、善か悪か。あるいは吉凶禍福というような言葉もあります。こういう分別をする。正邪、真偽。だからそういうふうに分けていろいろ分別する。正とか邪とか本当、嘘とか良いとか悪いとか、そういう分別されている事実を事実だと思う。分別されているものを事実だと思う。例えていけば幽霊を見た。幽霊は事実だと。見た人はね。幽霊ならまだああそうかと分かるようなところがあるにしても、見ない人はないというでしょ。見たことがない人はないというでしょ。そういうふうに分けて事実というものが、そこに妄念妄想が出てくる。こういう問題が取り上げられているわけですね。なぜ人間は妄念妄想を描くかと。

このごろ岸田秀という人は「唯幻論」といってね。ある一面の真理をとらえていますね。すべては幻想だと。それはそうでしょう。主観的な分別で、是非善悪、吉凶禍福、正邪真偽いろんな分別をして、ものを見ておるわけですから。結局主観でとらえる。すべては幻想だと。「唯幻論」と。この前亡くなった映画監督は何といいましたかね。このごろすぐ人の名前を忘れますが。亡くなったというか自殺した伊丹十三と対談の形で取り上げておる。あれなんかなかなか唯幻論を互いに鋭く、伊丹十三もそういったことにやはり非常に関心が深かったんですかね。とにかくたくさん本を書いている人ですね、岸田秀さんという人は。精神分析、ご自分がノイローゼのような病気で悩んで、そういうことがきっかけになってフロイトを勉強したらしいですね。早稲田大学時代に。

とにかくそういう、いま真理に触れなければ、事実というものは明らかにならない。絶えず妄念妄想、岸田秀さんがいうように、すべては幻想、思い描いておるに過ぎない。まあそういうことがひとつ言い表されている言葉ですが、もう一つそれと重なるような意味ですけど、じつはその真理に照らされることによって計度分別している。いろいろと計度分別して、その分別に縛られている。そういう事実が照らし出される。そういう意味も同時に言い表してあるわけです。

だから現実をですよ、宿業なら宿業という言葉を目にし、ある程度理解できておるとしても、なかなかその現実を宿業として受け取れない。もし我々が分別で宿業と受け取る場合は、もうあきらめになったり、そういうものになって行くわけです。だから真理に触れると。『三十頌』の言葉でいえばね。それを言ってみれば先ほどの曾我先生の言葉でいえば大悲の光明と。大悲の光明に照らされてはじめて私どものそういう自分の分別に縛られているんな解釈をしておる。そのいろんな解釈の中に縛られておる。そういう固執、執着と

いうものが照らし出され、ひるがえされていく。そういう形ではじめて宿業の身、宿業の身の事実に戻るといえるんだということを教えてくださっているんですけど。

## 六

まあいわば、三十頌でいわれる真理にしろ、曾我先生が大悲の光明という言葉で言い表してあるにしろ、そういう真理に触れたのが「先師口伝の真信」といわれるものです。あるいは大悲の光明に触れたのがですね。ですから逆にいえば「先師口伝の真信」が大悲の光明を表しているわけです。照らされたものが表しておる。これがまあ大悲の光明の特質ですわね。弥陀の光明の特色です。弥陀の智慧とかですね、というような言葉で言い表わされている智慧は責任を負うて、生きていることに責任を負う。責任を負うておるものが負うておるものの中に開かれてくる智慧です。

曾我先生が宿業本能というふうにいわれるあの本能は、そういうことを言い当てようとしておられるのではないかなあと私は思いますけども。責任を負うてこうしてこのように生まれてきた。このように生まれこのように生きておる、そのことに責任を負う。そういう意味を本能という言葉の中に言い表してあるのではないかなと思いますね。本能が生まれながらにして与えられている。動物的本能というようなことではないですわね。たんに。無関係ではないでしょうけどね。つまり責任を負うてという意味を表してあるのが大悲ですわね。全責任を。

大悲の光明とか弥陀の智慧という言葉で言い表してある智慧は、ほんとに生まれ出てきた生まれたことを、その人の意識はともかくとして、ほんとにその生まれたことを尽くして行くといいますか、そこに「生まれた来たんだ」ということに責務を感じず。なにかそのことを無駄にしないですね、そういう生き方をしてこられた人々の上に表れて来た智慧でしょう。誰かが考えた智慧ではないです。誰かが悟ったというような個人の悟りではないでしょう。

そういうこともしっかり見据えておく必要があるんじゃないですか。多分に神話的になりますからですね。物語というものは神話的に語られますから、阿弥陀如来のお慈悲というてね。なんかね、現実から宙に浮いてしまうけど、ほんとは現実そのものを物語るのが神話ですわね。物語とか。生き生きしておる物語というのはそういうものですわね。たんなる作り話じゃないです。

とにかくそういう、だから外の光明じゃないです。外にあるね。ほんとに生存、こうして生きておることに精一杯、それこそ責任といってもただ道徳的責任という意味じゃなくて、このように、このような形で、生きておるといっていろいろ制約がある。だれかの子として生まれた、だれかの親になるとかね。あるいは時代の制約もあるし環境の制約もあります。こういう時代にこういうところに、こういう境遇をもって生きておるといような、さまざまな制約というものを抱えておる。そこにその、そこから逃げ出して行くのじゃなしにね。

だからそういう与えられた境遇、与えられた身を精一杯生きる人の上に現れてくるのが弥陀の光明でしょう。大悲の光明というものでしょう。だからそういう人に出会うことによって、今度は照らし出される。それで大悲の光明というのであって、だから照らし出されれば照らし出された人のうえに現れてくるものです。

ですから「先師口伝の真信」といようなことが、もちろん大悲の光明に照らし出されて開かれてくるわけですけども、宿業の身ということに目覚めるといようなですね。ただ目覚めれば目覚めた人の上にその光明は現れる。ご本人は別にそんなことを意識していなくても。ですから親鸞聖人でいえば法然上人のうえに、法然上人が我が身を愚者と、愚痴の身とかいってね、宿業の身を表しておられる、愚ていような言葉で。そしてそのような生き方をしておられる、そこに現れてくる光明に照らし出されて親鸞聖人も「愚かな身」といような呼び返されていく。たんに法然上人の言葉だけではありませんでしょ。法然上人にはもちろんそのことを語っている言葉もありますけど、法然上人の言葉だけじゃなしに、法然上人の生きていられる生き方ですね。生き方のうえに表れている。法然上人のうえにはっきり見えなくても、法然上人のもとに集まられる、そういう念仏の道を歩んでいこうとされるそういう人々の上に表れておる光明です。



私などはやはり、曾我先生にお会いしたときにその先生に光明は見えなんでしょうね。だいたい光明というのは向こうに見るものじゃないけどね。阿弥陀さんの光明は向こうに見る光明じゃない。こっちが照らし出されることですけども。むしろ曾我先生のもとに集まってこられる田舎のおばあさんとかですわね、じいちゃんばあちゃんとか、いろんな人が集まってこられたけど、やっぱりこちらが照らし出されるのはじいちゃんばあちゃんでしたわね。話は聞いても聞いても分からんけども、じいちゃんばあちゃんたちが目を輝かしてね、帰って行かれる。

そしてどんな生活をしているのかそこまでは知りませんが少なくとも何かそこに目を輝かして現実の生活の場所に帰って行かれる。そういう姿にいくたびも触れて自分が曾我先生の話聞いても分からない、そんなことは分からなくてもそういう曾我先生の説法の座に身を置くことができた力は何の力かといえばそんな方々の力だったと思いますわね。私の足を引き留めたのもそういう方々です。私は途中でもうやめようかと思いました。どうもなんべん聞いても分からんしね。もうこんなこと聞いてどうにもならんのでないかと。

だけど別にそのばあちゃんたちが、あんた止めたらいかんよと、そんなこと言われたわけではないけど、その姿がなんか止めさせないというかね。だからそういう意味でいえば弥陀の光明を賜ったといえば、むしろ曾我先生というよりもその会座に集まった方々ですわね。またそういう方々を通して曾我先生の「私は愚か者でございます」という言葉が鼻に付かなかった。だいたいそんなことしょっちゅう言われたら鼻についてしょうがないですよ。先生しょっちゅう「愚か者でございます」と。そんなこと言わなくてよさそうなものだ。わざわざね。ところがそれがなんにもてらいがない言葉として聞けるわけです。またそういうことでした。私らがあまり云うとおかしいですけどね。「愚か者でございます」などと人の前でいってもどうも素直に言葉がすーっと出て来ないしね。ほんとに身についておるといことはああいうことかなあと思いますけどね。

安田先生はそういうことはおっしゃらない。やはり身につかんわけですからね。「愚か者でございます」と曾我先生みたいに。安田先生は代わりとってはなんだけど、「僕はまだ学生なんだよ」と。学び続ける。それが「愚か者」という言葉なんでしょう。「僕はまだ学生なんだよ」といって最後の最後までですわね。

## 七

とにかく「先師口伝の真信」とこういわれているのが今度は私たちにとっては、触れるものにとってはそれは光明ですわ。まさに。それ以外に弥陀の光明というものはありやしませんわ。そういうところを離れて弥陀の光明を考えたらえらい神秘的な話になりますわね。はっきり申し上げますと『歎異抄』の中で「先師口伝の真信」ということをまさに言い表されている言葉といえば、たくさんありますけど、その中でいくつか取り上げますと、第二章では「いずれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし」、いずれの行もおよびがたき身なれば。それから十三章、先ほどの宿業のことが取り上げられている十三章ですわね。「さるべき業縁のもよおせば、いかなるふるまいもすべし」。それから第九章に出ておる言葉で申しますと、「久遠劫よりいままで流転せる苦悩の旧里はすてがたく、いまだうまれざる安養の浄土はこいしからずそうろう」。久遠劫よりいままで流転せる苦悩の旧里は捨て難いと。こういう言葉ですわね。

だいたい広く云えば、真宗聖典に取り上げられている言葉がもう大悲の光明ですわね。『教行信証』でも親鸞聖人は「顕浄土真実教行証文類」と、「顕浄土」というのは大悲の光明でしょう。顕すと。浄土といたって大悲の光明です。それを顕す文類。言葉ですわね。『教行信証』にたくさん集められております。愚禿親鸞集とかいってね。それは親鸞聖人が責任を負うておられる。我が身を照らし出してくださったと。ただかき集めたというものじゃない。これもそうだろう、あれもそうだろうといっているいろいろ文献を並べたというんじゃない。顕浄土真実教行証文類、途中を省略していえば、浄土を顕わしている文類でしょう。それを愚禿親鸞集めると。

じゃあ『教行信証』の中にたくさん出ている文類を読むと我が身が照らし出されるかというとなんだかぜ

んぜん光明にはならんと。こういう問題もありますかね。だから光明を被るということについては「ナンマンダブツ」がないと光明を被ることができない。「光明名号顕因縁」といわれるですね。南無になれば、理知分別で読んだって光明にはなりませんかね。理解するだけです。どこまで行っても。ある程度理解する。それはもうほとんど不可能とっていいんじゃないですかね。しかし絶対にないともいえないでしょうけどもね。闇が破られたという人も出てくるかも知れませんがね。

しかしそんなことはともかくとして、少なくとも私どもにそういう頭が下がるそういう南無の心を成就すると。南無帰命を成就するというナンマンダブツがなければ、ナンマンダブツに触れなければ光明を光明として受け取るということもできませんでしょう。逆にナンマンダブツが南無の心を成就してくださるといっても、光明に触れないと、だからこの因縁は相互に関係をもっているですね。念仏だけ称えておれば光明に会うかといえばそんなものでもない。法を聞くということがないとですね。じゃあ聞法だけしとればナンマンダブツなしに光りになるかというところもそういうものでもない。そういう両方の関係。

そういう大事なことがありますけども、だからただ今申し上げました口伝の真信が光明だといったってそんなこと思っておったってだめですけどね。これが光明だと思っておればいいということじゃなくて、まさに私どもの身が照らし出される。

もっと大掛かりに大悲の光明を顕しておるのは『大無量寿経』でいえば下巻の三毒五悪段です。そこには一言でいえば「業道自然」ということが照らし出されていますね。業は善悪、善であれ悪であれ業によって六道におもむくと。地獄、餓鬼、畜生、修羅、人、天というような言葉で表されているような境遇です。つまり心身の境遇、在り方ですね。どういう在り方をするか。その在り方を引き出してくるのが業だと。業によって六道を引くと。こういう意味を言い表している言葉が業道と。これは何も『大無量寿経』のなかに直接業道という言葉は出てこなかったと思いますけど、業によって六道を引くということをいろいろな形で取り上げてあります。

業道ということを直接取り上げているのは、これもまあたくさんあるわけでしょうけども、私が気が付いているのは『正法眼蔵』ですね。「業道依正」と。『正法眼蔵』の仏性ということを取り上げてあるところですね。はじめの方ですね。そこに業道依正と。つまり業によってそれぞれの、正というのは正報、身のことですね。依の報は依報。環境のことです。国土といってもいいです。つまり業によって六道を引くということももっと具体的にいえば身とか環境の在り方が違って来る。業道依正といつてね。

だから衆生といってもそれぞれに違いがあるんだと。身ということでそこに心も包んでね。感覚にしる考え方にしろ、同じではない、違いが出てくる。在り方に違いが出てくる。そうでしょう、見るのでも、花の好きな人は花がよく見えるしね。全然無関心な人は花がそこに咲いとって通り過ぎて行きます。酒の好きな人は酒屋が目につくしね、飲み屋がね。このごろ飲まなくなったら全然目につかなくなった。前、だいたいはおぼえておった、京都で。だいぶ飲みましたから。店が変わったということもあるけどですね、このごろ関心がないものですからどこに何屋さんがあるのか分からない。果物屋さんくらいが見えるだけです。そんなものでしょ。それだけでも違いが出てくる。見るということだけでも。何が見えるか。何が聞こえるか。音楽でもそうです。いろいろな声、音。そういう違いを業道依正ということで道元禅師の仏性論の中で取り上げられている大事な問題です。

曇鸞大師は「別報の体、共報の用」といってこれは『教行信証』に取り上げられていますけれども、証の巻二九一頁ですね。そこに、6行目ですが、

衆生は別報の体とす。国土は共報の用とす。

別というのは共通していない。独自というような意味ですね。ここで使われる別は。身はそれぞれ独自の、他と共通していない。不共ということをも別という言葉で言い表してあるですね。詳しくは不共といっても不共の共、それから不共の不共と。不共の共ということはどういうことかというところ、人の身という、共通していない人も人の身という意味では、人の中では共通している。ほかの生き物とは共通しないけど、ただ不共の不共といったらだれかの子ですわ。たんなる人の身じゃない。だれかの子という限定をもっている。ただ肉体の作りが違うとかたんなる物質的な意味だけじゃない。体の背丈が違うとか顔の形が違うとかそういう

生物学的な意味ではなくて具体的にはだれかの子なんです。そういうような内容、ただそれだけじゃありませんけどね。だれかの子といってもだれかの最初の子とかね。二番目とか違いがあるんです。同じ親だといっても違いがある。そういうのを不共の不共といわれますけども。共通しているわけじゃない。それから共報の、環境の方はそこは一応共通している。人ですとね。だけどそれも本当は詳しくいえばたんなる共ではない。共中の不共といっていち共通しておるけれども一人一人違うと。そういうことまでは曇鸞大師は取り上げておられるわけじゃないですけどね。一人一人の環境といたって一人一人の分別の仕方によって違いが出てくる。

まあそういうように業道自然。業によってそこにいろいろな境遇というものが違う。そういった問題が非常に詳しく取り上げられているのが『大無量寿経』下巻の「三毒五悪段」と普通呼ばれているところですね。まさに大悲の光明に照らされておる内容ですわ。人間が考えたというもんじゃありません。そういうことで貫かれてはいるんですけども、代表的な言葉を一つ二つ取り上げられておきますと、六九頁の終わりから2行目、

自然の三途無量の苦惱あり。その中に展転して世世累劫に 出る期あることなし。

と、そこに自然の三途無量の苦惱ありと。自然のといっていち業道自然の自然を表してあるんですけども、自然の三途無量の苦惱あり。その中に展転して世世累劫に出る期あることなし。機の深信の言葉と共通しているような言葉が出ておりますでしょ。

それからもう一つ注意していいと思う言葉は七四頁の方を見ていただきましょうか。終わりから7行目の下の方ですが、 生死・善悪の趣き自然にこれあることを開示すれども、肯 てこれを信ぜず つまり随順しないということですね。それからそのあと最後の行のところに、

善悪報応し禍福相承けて、身自らこれを受く。誰も代わる 者なし。

これがですね、先ほど申しました宿業ということによってはじめてそこに明らかになってくる固有、誰も代わる者なしということの具体的な内容です。「誰も代わる者なし。数りの自然なるなり。」とこういってですね。

つまりこうして照らし出されてみれば、人間はたんなる生物の中の一つではない。生物、生き物としてとらえますと生きておることに責任はないですわ。そんなもの感じられません。たんなる生物の一つですから。別に何をしようと自分の勝手だということになってしまふ。責務とか使命とか、まあ平凡な言葉でいえば「つとめ」ですわ。だいたい生物学でとらえますと無因論になりますでしょ、存在が。まあ無因論といってもいまの遺伝子とかそういうことで取り上げられていますからきれいに無因論という意味じゃないですけど、無因論というのは自分に責任を負わない。自然現象とこういうのが無因論。ですから昔の無因論は自然外道といわれるのですわ。つまり自然現象としてみるわけです。その自然現象のどういう自然現象かということでは遺伝子がどうたらとかね物質がどういうふうに変化したとかね。ものの変化ですわ。心理学でもそうでしょう。ある意味で自然現象。脳の自然現象。実験心理学なんかはだいたい脳です。脳の働きなんだ。今日はやっているのは「唯識論」といってね、養老孟司なんかそういうことをいっている。

仏教が明らかにしてきたのは唯識です。だけどその識ということも実験心理学でとらえると意識を実体化するんです。唯識というときの識は実体的な意識ではない。作用ですわね。そういうなんといえますか、自然現象ということになると何も責任はないじゃないですか。他因論となると責任を他に、運命だとか、あるいは親が生んだとかねとかいってね。親の方に責任。つまり宿業ということが取り上げられるのはこうして生きておることが、無因でもなく他因でもない、そこに自因、ほんとにね。それぞれに責任がある。ただどういう責任かということがはっきりしないと責任地獄に落ちますけどね。そういう意味ではなかなか仏法もめんどうなもんですわね。毒になったり薬になったり、一歩誤るとそれが全部毒になっていく。また毒にならないようなものは薬にもならないしですね、その辺がなかなか、毒にも薬にもならん、そんなものはあってもなくてもいいようなもんなんです。そういう意味で毒になるからという警戒して遠慮する必要はない。このごろは宿業という警戒されてましてですね。なんか遠慮して、まあ毒をばらまいてきたという歴史があるもんだからね。それは引き受けんならんでしょう。あきらめをばらまいてきたという歴史があるから、といって遠慮しなけりゃならんということじゃないでしょう。むしろその歴史を引き受けんならんでしょう。

とにかくその業縁に動かされておりながら、その業縁に随順することができない。業縁に動かされておるんですね。しかし業縁に随順できない。そういう凡夫の身ですね。だから大悲というてもそういう凡夫を引き受けるという意味で「悲」になっているんです。大悲。業縁に動かされている。しかし業縁に随順しない。随順しきれない。そうですわね。結婚しても離婚しますわね。じゃあ離婚しないなら随順しているか、そうでもない、あきらめてね。いまさらどうすることもできんというてね。それはやっぱり同じでしょ。離婚しとると大差ない。あきらめとるんだから。ほんとに業縁の厳粛な事実としてそれを受け取れない。それを引き受けて立つと。だから宿業観といってもそういう大事な内容をもっているものですね。そういうなんといいですかね、そこに眼を開き、そのことを明らかにすると、そこに真宗を再興するという大きな事業というものがそこから開かれてくるんだということを曾我先生が教えてくださり、そのことを徹底して言ってくださったそういう安田先生の御恩というものが偲ばれるわけでございます。